

保育園年中・年長児の他児に対する向社会的行動

子どもの内的表象，活動場面，保育士の関与・声かけ等との関連



東京大学大学院 教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター(Cedep)
特任助教 西田季里

向社会的行動とは？

他者／他者集団の利益のための行動，
またはそれらのニーズを満たすための行動

共感

視点取得

観察が難しい

向社会的行動

観察できる
本当に共感や利他性，
他者の視点取得に基づく行動
かどうかは，分からない

幼児の向社会的行動

親評定の質問紙調査(CBS)

親の主観, バイアス

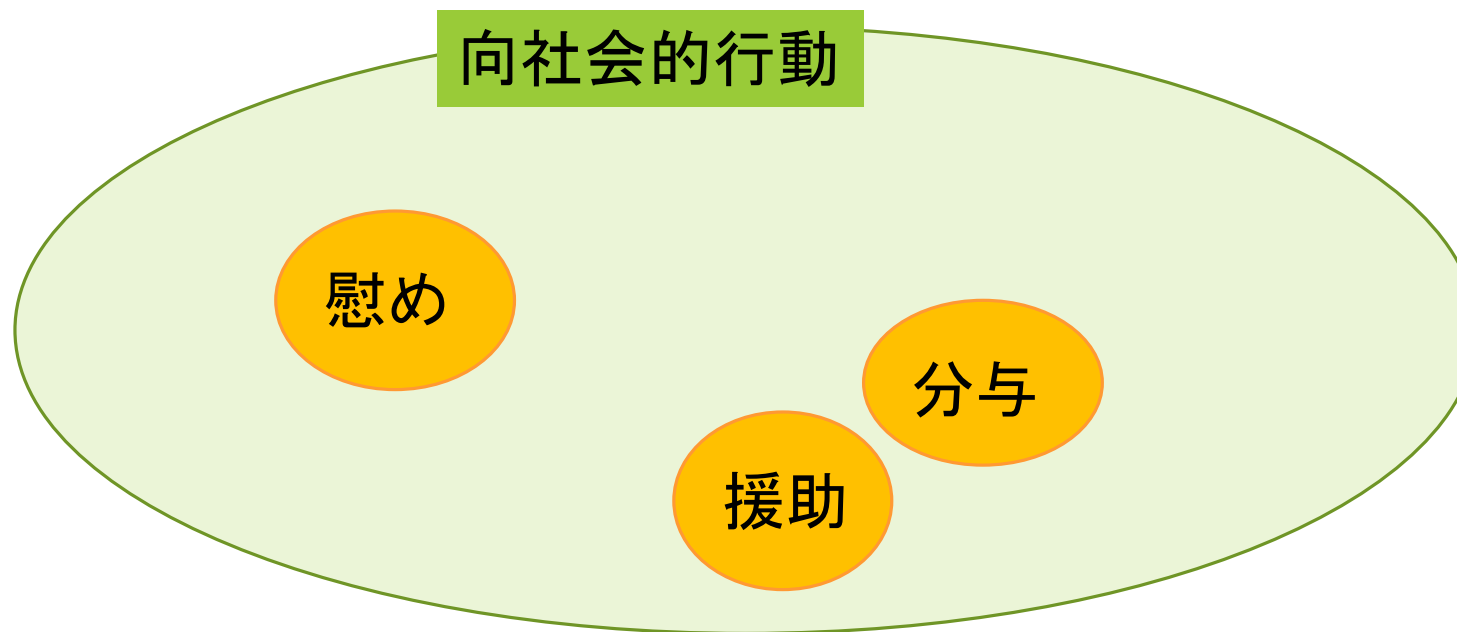
- ※他の子を助ける
- ※友達に親切である
- ※他の子が困っていると心配する
- ※他の子が困っているとき, 助けたり励ますことができる
- ※他の子の気持ちを理解しようとしたり, 共感する
- ※道徳性の芽生えがみられる
- ※友達に協力的である

実験的観察法

- ※実験者が演技をし, 子どもの反応を見る
- ※マールを与え, 他児に分与するか見る

非日常／現実との乖離

シチュエーションが限定的過ぎる



- ・実際、日常場面でどのような向社会的行動が起こりうるのか？
- ・状況や周囲の他者の影響をどのくらい受けるのか？
- ・保育者がそれを促進／抑制したりするのか？



今回の調査の特徴

自然観察法

調査者が手を加えない,
日常場面(自然場面)を観察する

時間がかかる, 見たい行動が都合よく起きない, などの理由から
心理学では不人気な手法

実際の生活世界における子どもの向社会的行動を観察できる

多様なシチュエーションにおける向社会的行動の生起を観察できる



今回の調査の概要: 観察

調査時期: 2015年9月～2016年8月(1年間), おおよそ週1回ペース

調査対象: 調査開始時に年中クラスに在籍していた15名のお子さん(男児5名, 女児10名)

観察の概要:

- ・午前中(9-12時)は対象児全体を対象に撮影
- ・午後(15-17時)は対象児1人20分ずつ個別に撮影
- ・1年間で全体約138時間, 個別1人につき18～20ファイル(360～400分)撮影
- ・撮影したビデオを以下の要領でコーディング(他児に対する行動に限る)

1年の縦断調査中,
年中から年長になりました!

- ・向社会的行動が生起したら逐一サンプルとして取り上げる(イベントサンプリング)
- ・行動生起頻度のほか, そのときの活動場面, 成功／不成功, 行動のサブカテゴリ, 対象児, 保育者の関与, 保育者の声かけの有無, エピソード



向社会的行動の定義

「他人あるいは他の人々の集団を助けようとしたり, こうした人々のためになることをしようとする自発的な行為のこと」
(アイゼンバーグ & マッセン, 1991)

今回調査で観察対象とする向社会的行動

「児が他児および他児の状況に**何らかのニーズを見出し**, そのニーズを満たそうとして**自発的に行う行動**」

向社会的行動が生起したとする判定基準

- ✓ 児が**ニーズを見出している**と観察者から判断できる
- ✓ 見出されたニーズが適切かどうかは行動生起の有無判断では問わない
- ✓ **自発的**だと観察者から判断できる

行動種類については, Eisenberg & Mussenの定義と, Weir & Duveen (1981)の質問紙/観察項目, および観察中に見出された向社会的行動からカテゴリ作成



向社会的行動の成功／不成功の判定基準

児の向社会的行動が行動対象児のニーズを満たした（肯定的反応，状況のポジティブな進展がある）と観察者から判断できる場合，**成功**とする



対象児が気付かない，否定的反応をする，状況が悪化するあるいは全く変化しないと観察者から判断できる場合，**不成功**とする



保育場面を以下の4つに分ける

一斉活動（朝・帰りの会，授業，整列，読み聞かせ）

生活活動（身支度，移動，食事，おやつ）

自由遊び（園庭，室内遊び）

待機（次の活動のために待っている）



他児のネガティブ情動に反応して生起する向社会的行動を
情動反応行動として計数した

情動反応行動の数および成功数と、
(非情動反応行動を合わせた)向社会的行動全体の
数と成功数を調べました



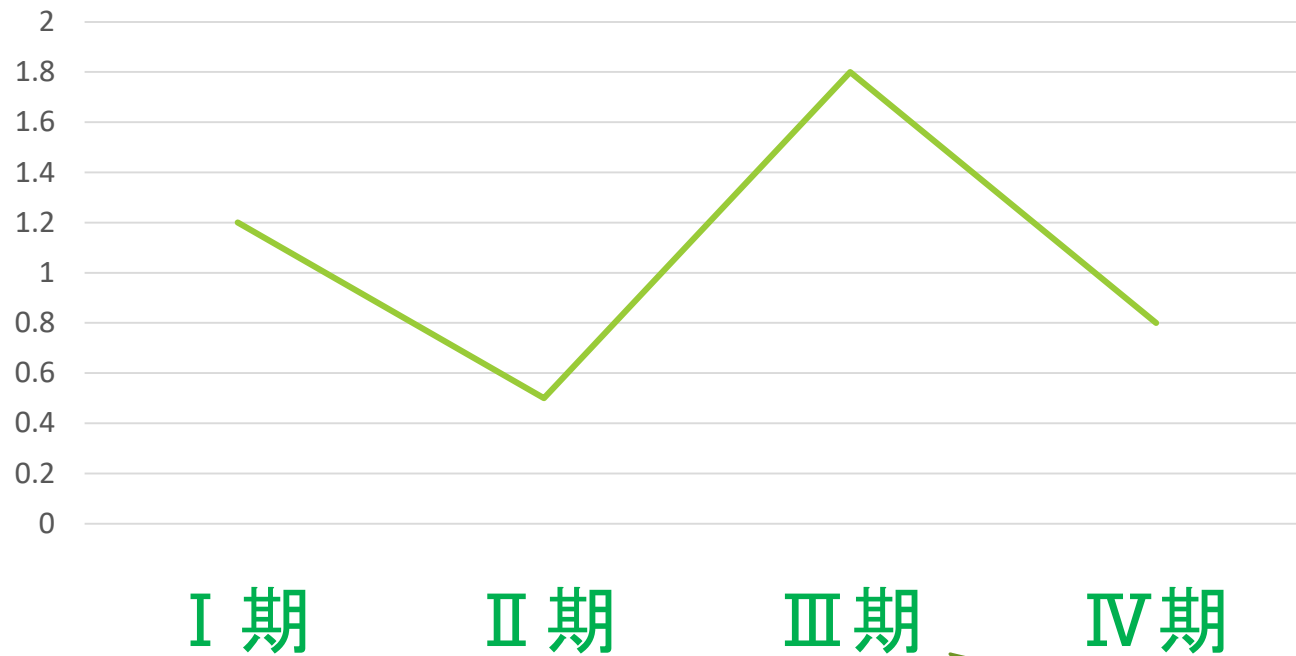
情動反応行動



非情動反応行動

調査を進める中で出てきた調整

1年間(12か月)をⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期・Ⅳ期に分け、
各期の集計を出し、変化を見る



年度替わり
年長さんになったよ！



集計・分析結果

全体観察 (2017年度報告)



※138時間分の動画ファイル

実際、日常場面でどのような向社会的行動が起こりうるのか？：観察された行動

関係調整

仲裁, 擁護

他児の援助を保育者に頼む, 他児(A)のニーズを満たすため他児(B)を動かす

分与, 分配

道具の貸与, 消費物の分与, 分配

援助

怪我した子を助ける, 気分の優れない子を助ける, 他児のタスクを助ける,
他児が落としたものを拾ってあげる, 他児がこぼしたものを拭く, 年下を世話する,
モノや場所を他児のためにキープする

情報提供

アドバイスをする, 他児が知りたがっている情報を提供する, 他児の誤りを正す
工作などのやり方を実演して教える

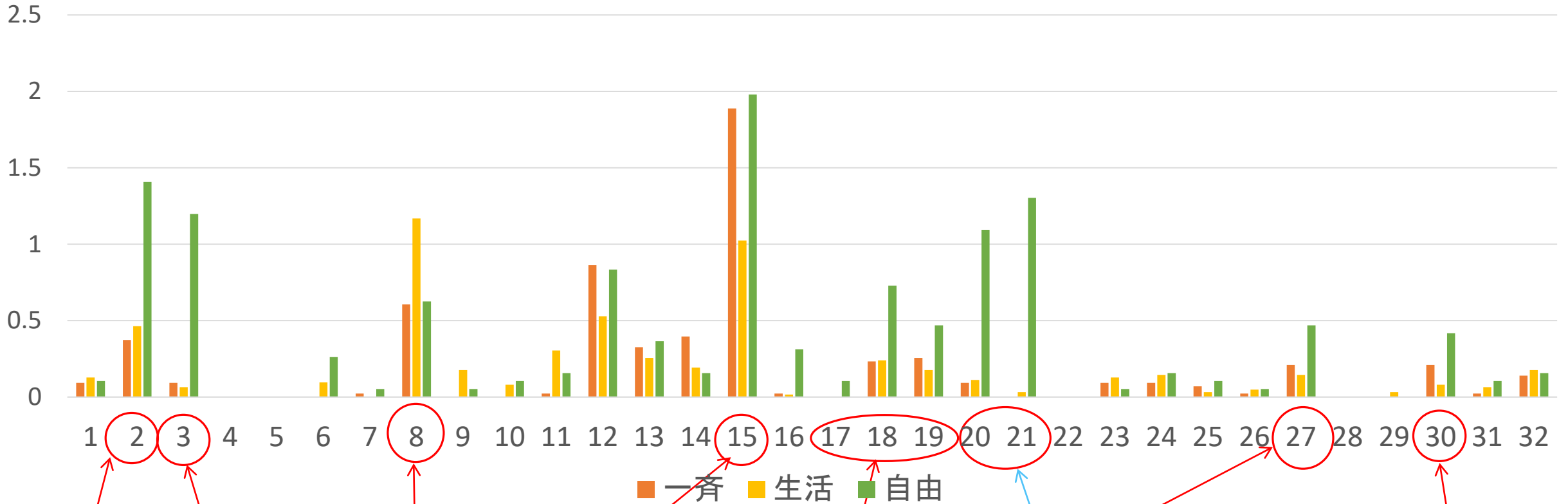
配慮

ネガティブ情動を表出する子に配慮の視線を向ける, 失敗した子に同情を示す,
ネガティブ情動を表出する子を見て同じ情動を示す, 慰める, 自発的に謝る
他児のネガティブ情動を予期し配慮の言葉がけをする, ネガティブな情動を表出する他児に話を聞く

社交

遊びに誘う, 協力してタスクを行う

3場面比較: 行動種類別頻度(1時間あたり)



“擁護”
自由場面で多い

“物(玩具など)
をあげる”
自由場面で多い

“タスクを手伝う”
生活場面で多い

“配慮の視線”
生活場面で少ない

“共感, 慰め”
自由場面で多い

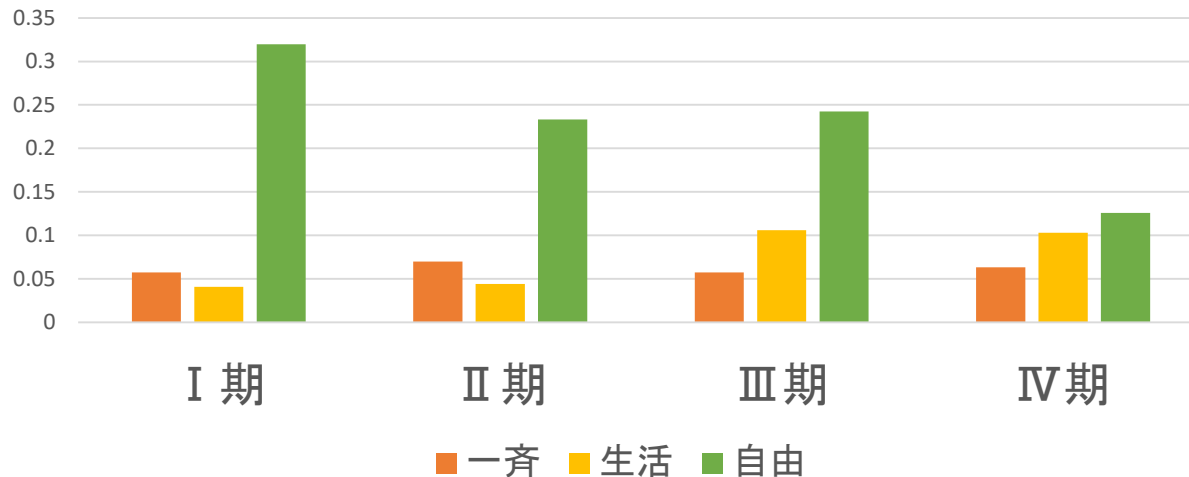
“仲間に引き入れる,
協同する”
自由場面で多い

“手本を示し
教える”
自由場面で多い

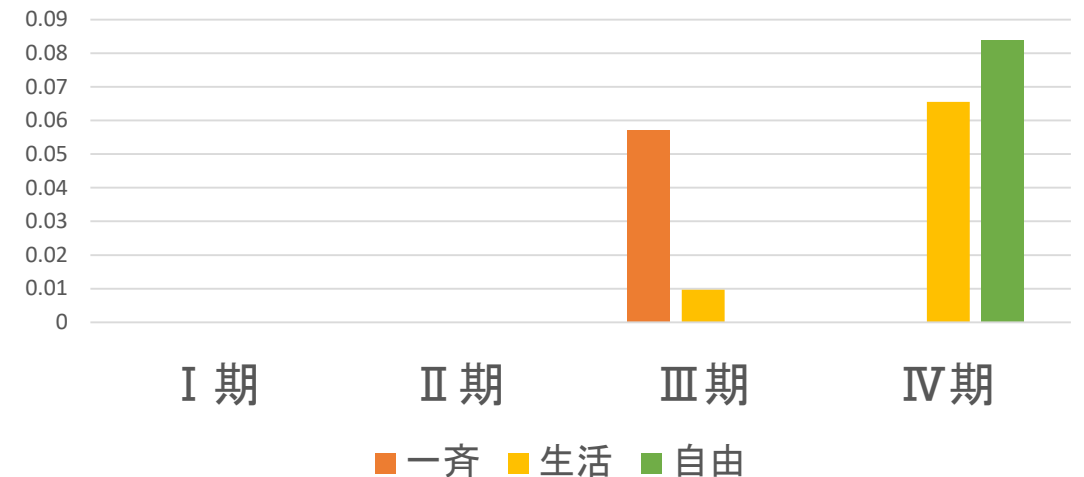
行動のバリエーションの多さは、
自由場面・生活場面 > 一斉場面

時期別に見ると、他児のけんかに対する行動において、
Ⅲ期以降に仲裁が登場するという変化が見られた

けんかでどちらかの肩を持つ、擁護
(600sあたり頻度)

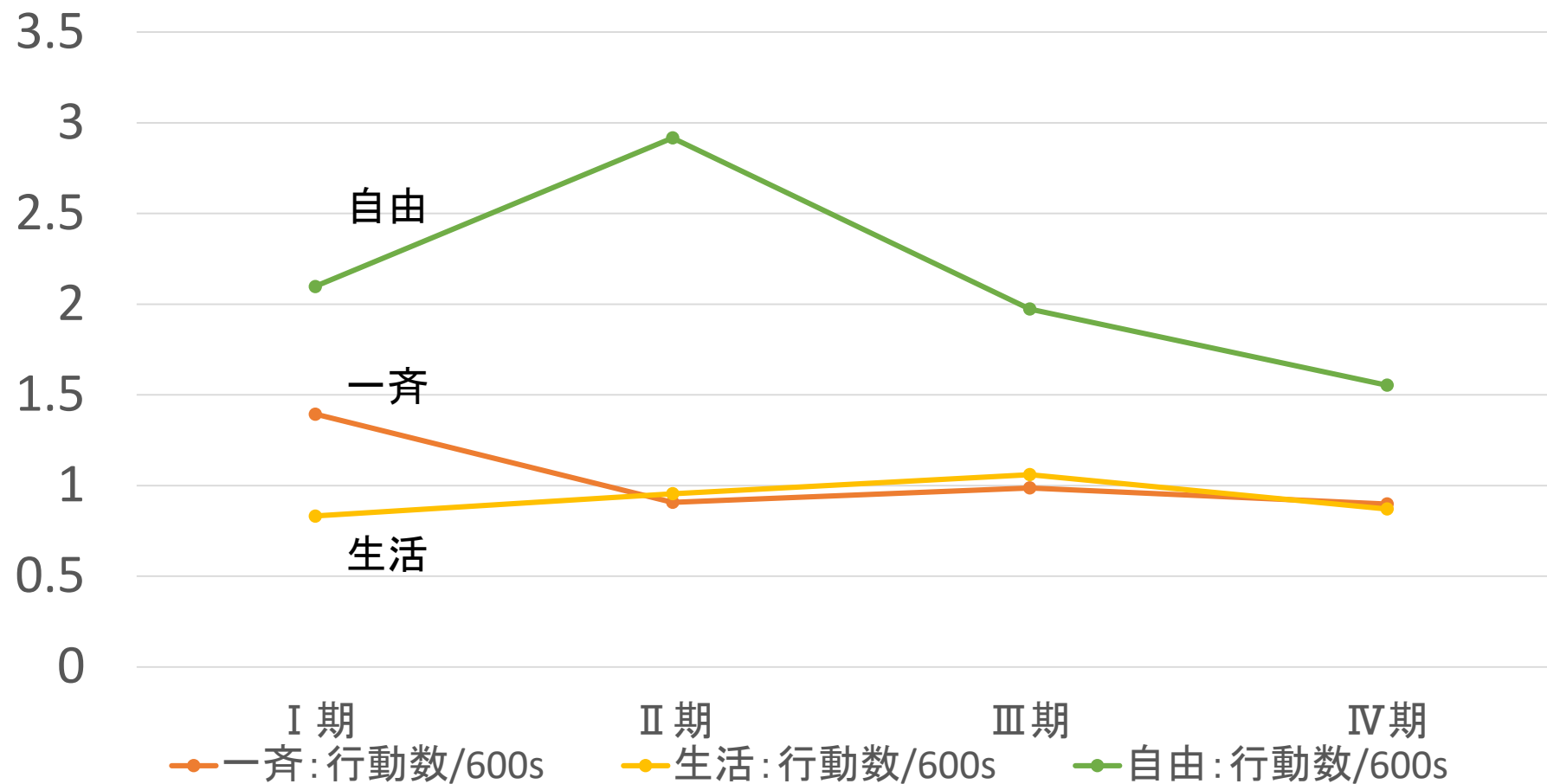


けんかの仲裁(600sあたり頻度)



活動場面が向社会的行動の出方に影響する？

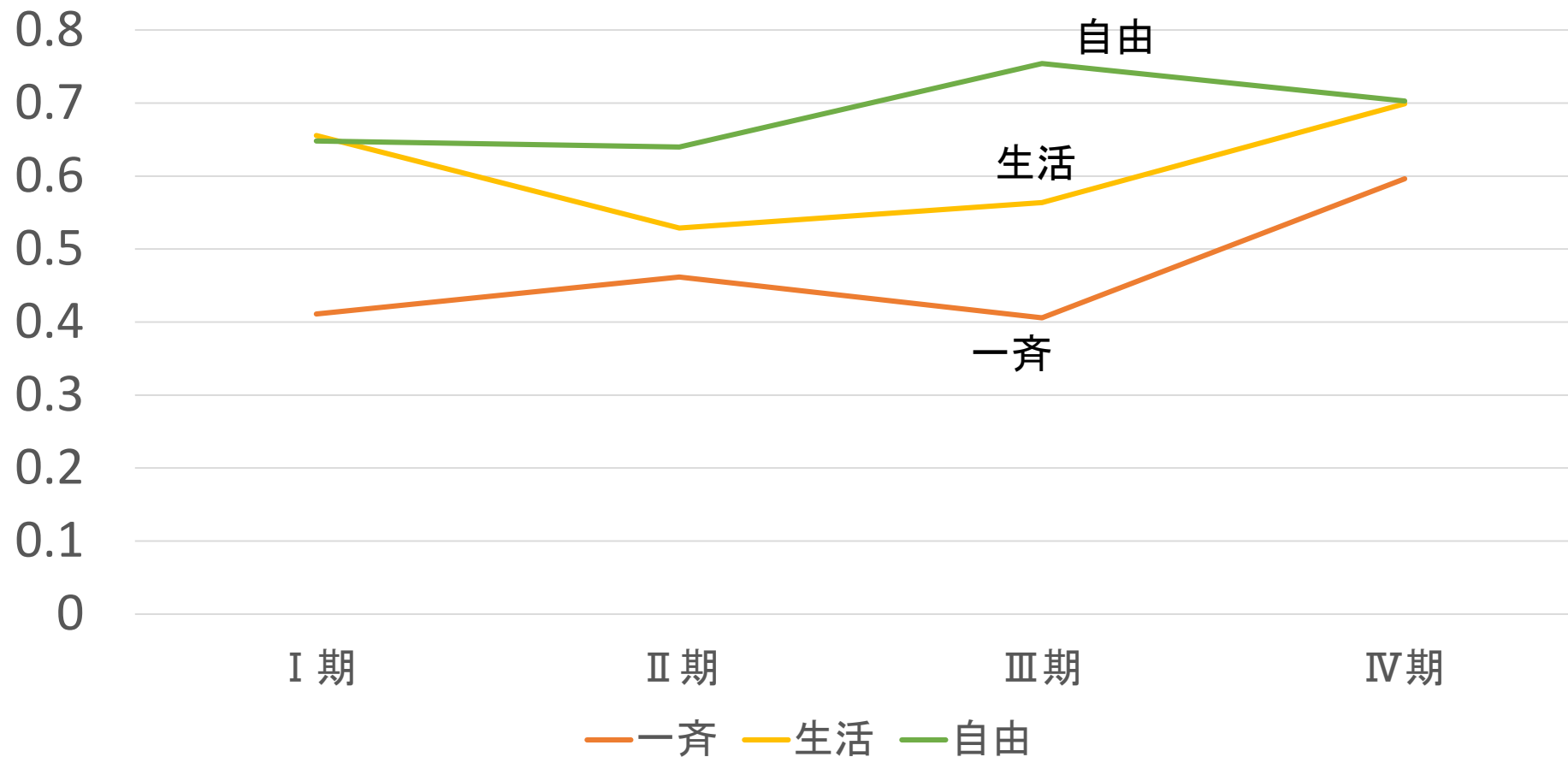
場面別行動頻度



自由場面で向社会的行動頻度が高い
行動頻度は I 期から IV 期にかけて低下

活動場面向社会的行動の有効性に影響する？

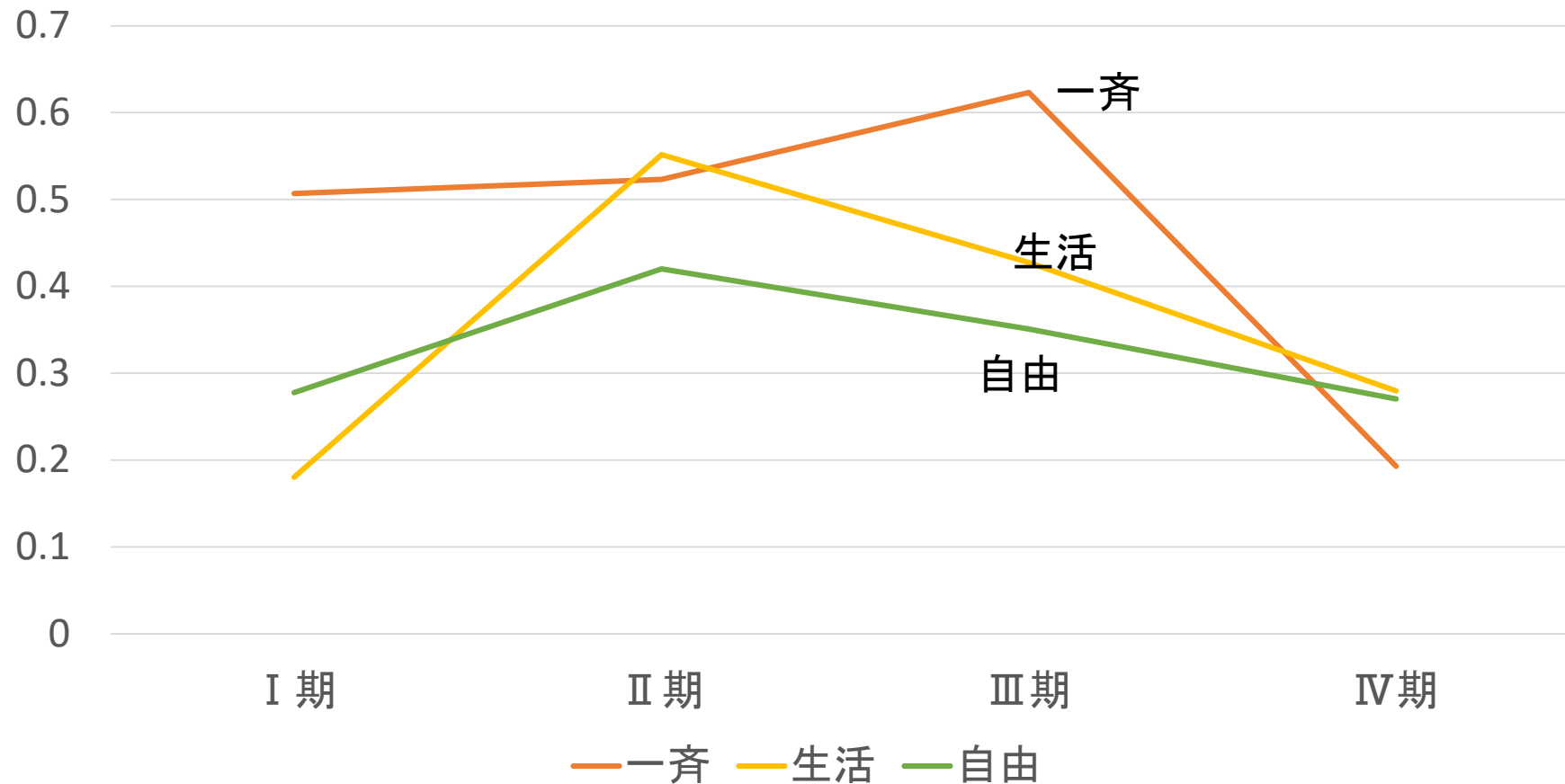
成功率



自由場面で成功率が高い
有効率は I 期からIV期にかけて上昇

活動場面が向社会的行動の種類に影響する？

向社会的行動に占める情動反応行動率

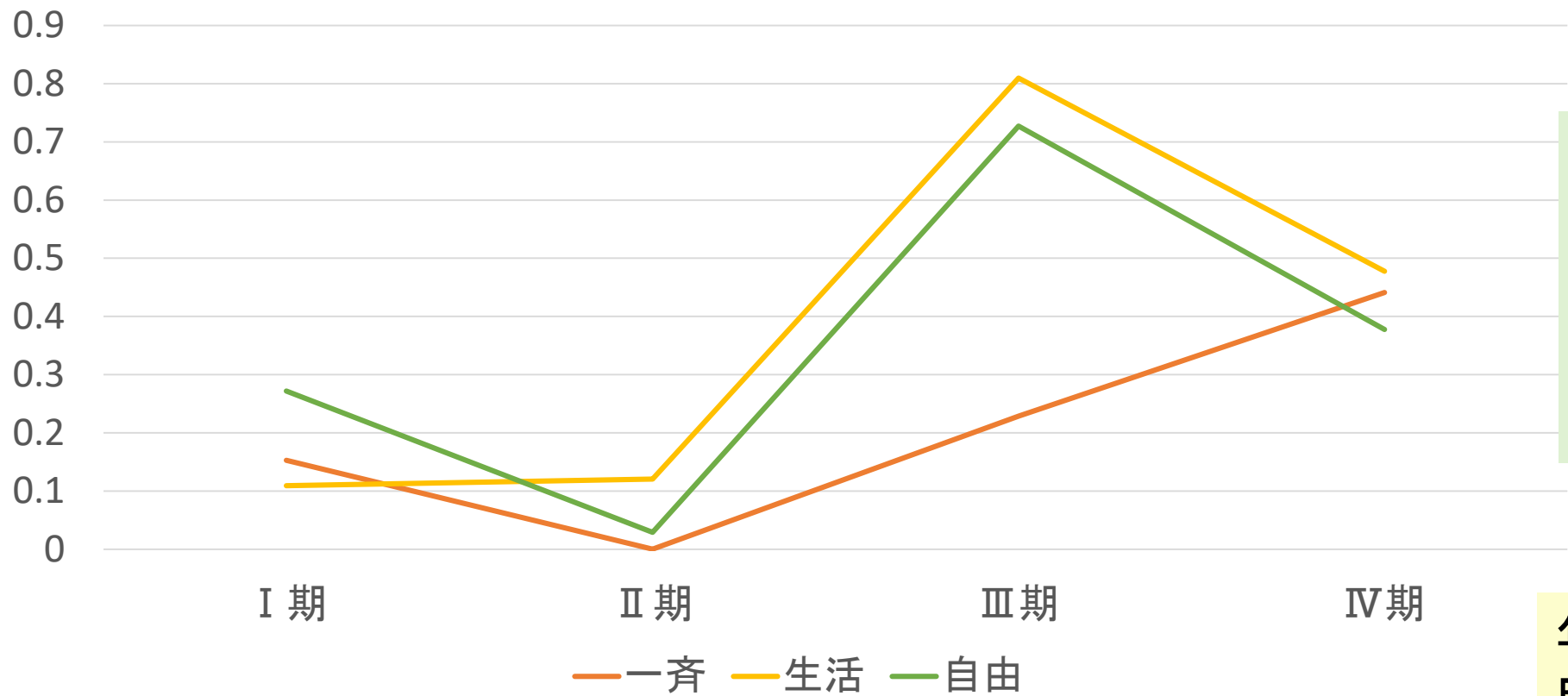


一斉場面で高い
IV期で低下

一斉場面では他児の泣きに視線が集中する傾向があり、注視行動数が多くなった。
IV期は他児の泣き等のネガティブ情動表出の割合が減り、**クラスが情動的に落ち着いていた**可能性が考えられる

年下への向社会的行動は？

年下への向社会的行動頻度 (600s)



年度替わりのⅢ期に、新しく幼児クラスに入ってきた年少児に向社会的行動が増加しかしⅣ期で減少

年少児がクラスに慣れ、助けを必要とすることが減った

向社会的行動頻度が下がった

情動反応行動率は下がった

成功率が上がった

年下への行動数の増減

IV期で泣き場面が減り、
クラスが情動的に落ち着いていた

その結果、配慮の視線行動が減少し、
成功率が上昇

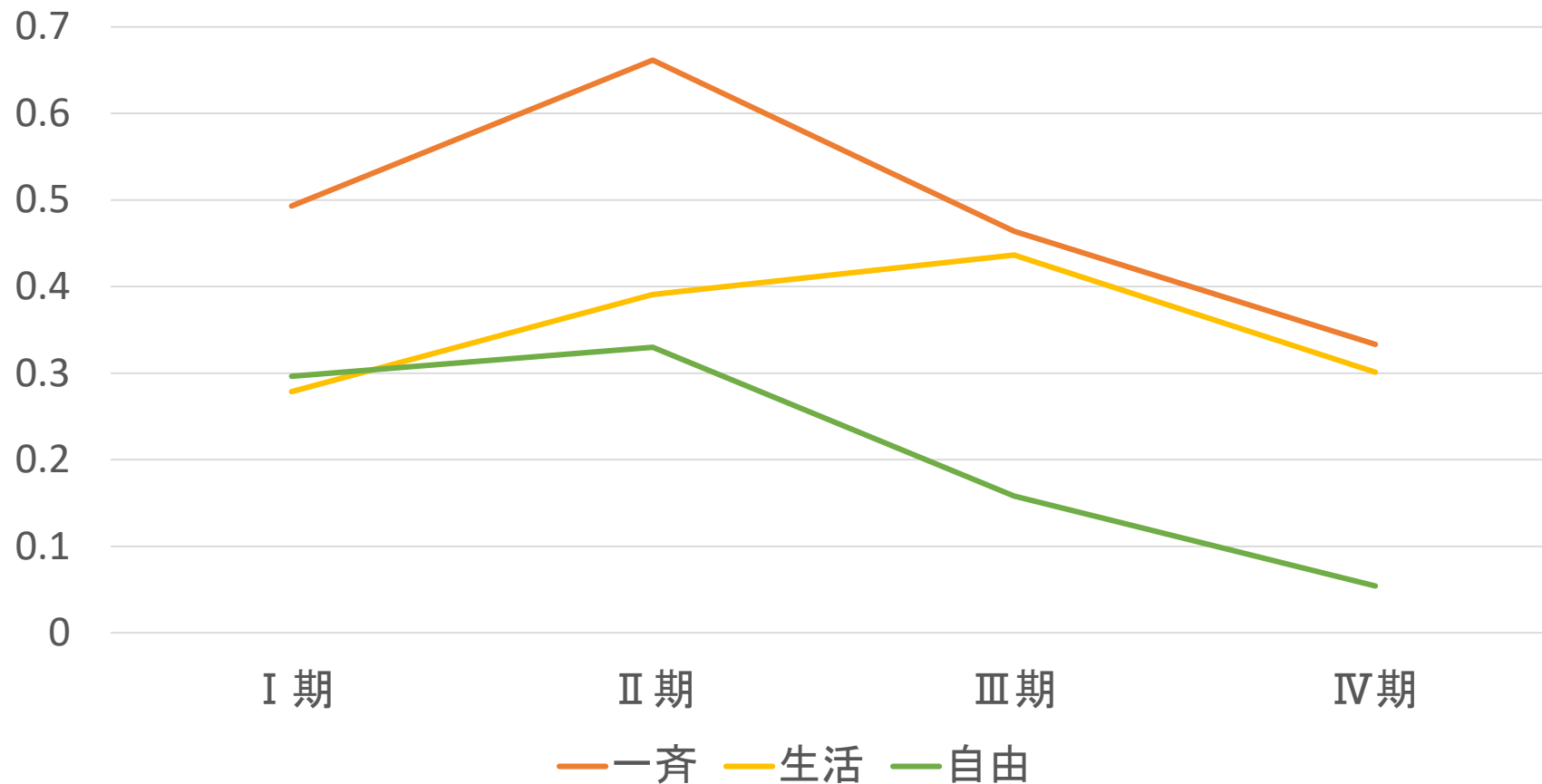
他児の援助ニーズの増減に合わせ、
行動数も増減する

クラス全体の向社会的行動頻度の減少は、先行研究と同じ結果だが、
その要因として、他児の向社会的行動ニーズの減少が指摘できる

クラス全体の向社会的行動数の多寡にはこだわらないほうが良さそう

保育者の状況への関与および声かけの影響？

向社会的行動場面への保育者関与率



自由場面では関与率低い。IV期で全体的に関与率低下

自由場面では保育者が関与しないから向社会的行動が多く、有効率も高くなる？

- 保育者の関与率と行動頻度の相関：
 - 【一斉】Ⅱ期関与率と行動頻度(1期 $-.636^*$; 2期 $-.769^{**}$; 3期 $-.773^{**}$)
 - 【生活】Ⅲ期関与率とⅡ期行動頻度($-.533^*$), Ⅳ期関与率とⅡ期行動頻度($-.601^*$),
自由Ⅱ期関与率と生活Ⅲ期行動頻度($-.637^*$),
自由Ⅳ期関与率と生活Ⅲ期行動頻度($-.671^*$)

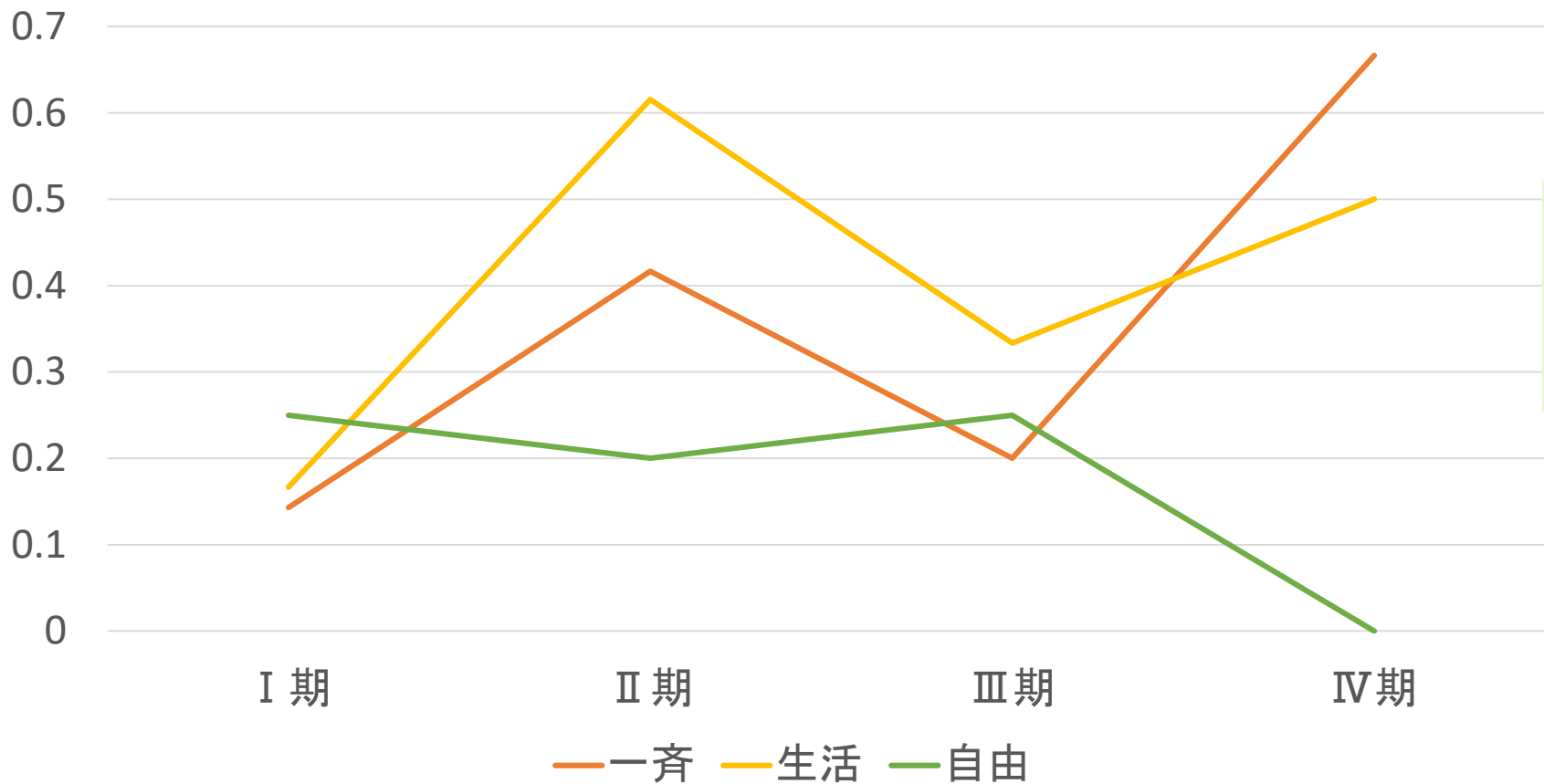
向社会的行動を多く行う子は保育者がいない場面で行う割合が高い

- 保育者の関与率と成功率の相関：
 - 【自由】Ⅰ期関与率とⅠ期成功率($-.780^{**}$),
Ⅱ期関与率とⅡ期成功率($-.544^*$),
Ⅲ期関与率とⅢ期成功率($-.628^*$)

自由場面では, 保育者がいると向社会的行動を取りやめがち

保育者の専門的配慮と声かけ

保育者の声かけが抑制的である割合



向社会的行動を抑制する声かけは生活場面が多い。Ⅲ期でいったん低下する

身支度など、自分のことは自分でできるようにとの配慮から、生活場面では他児への援助を抑制する声かけがなされたと考えられる。Ⅲ期は新年度のため、新年少児への援助が抑制されなかった

集計・分析結果

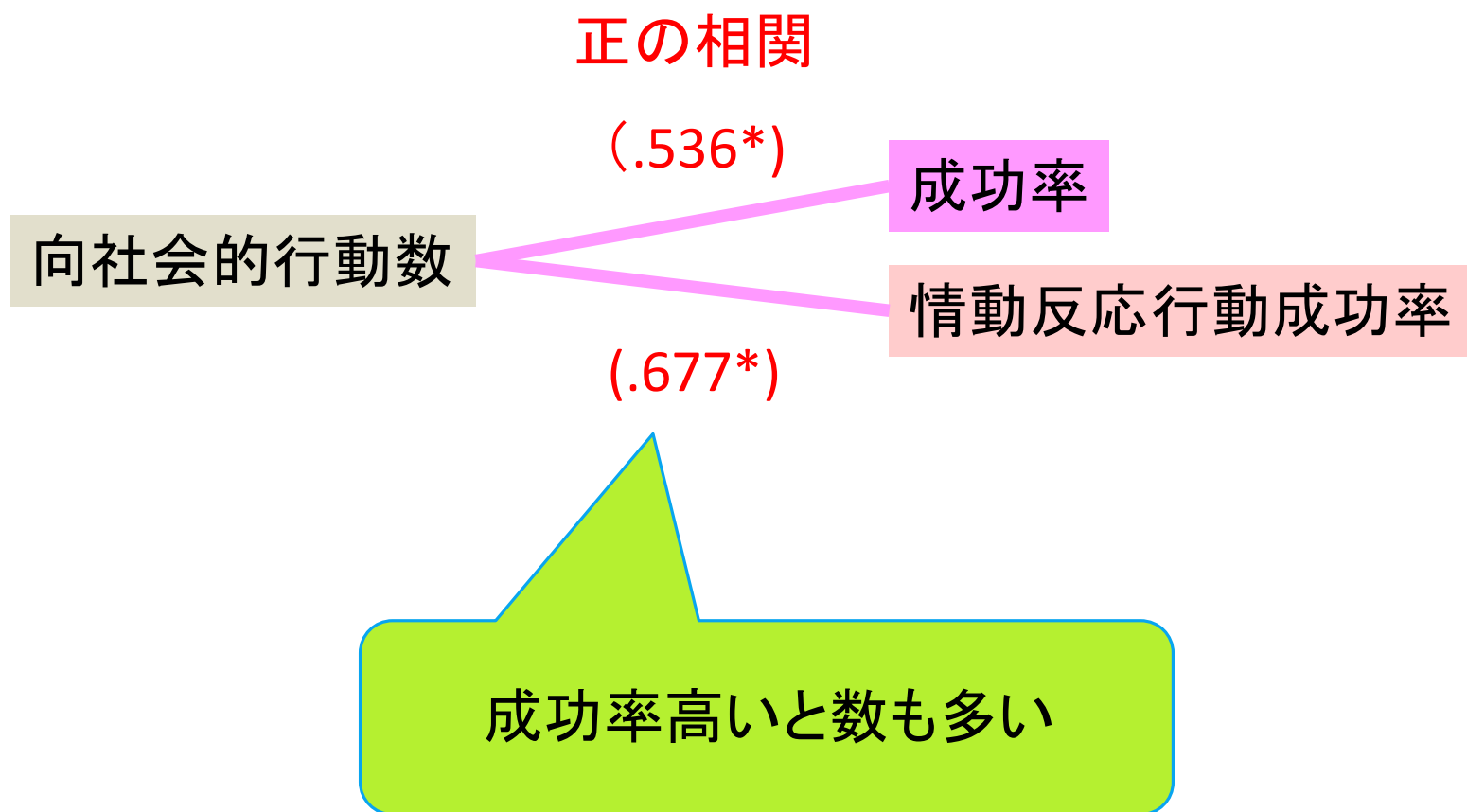
個別観察 (2016年度報告)



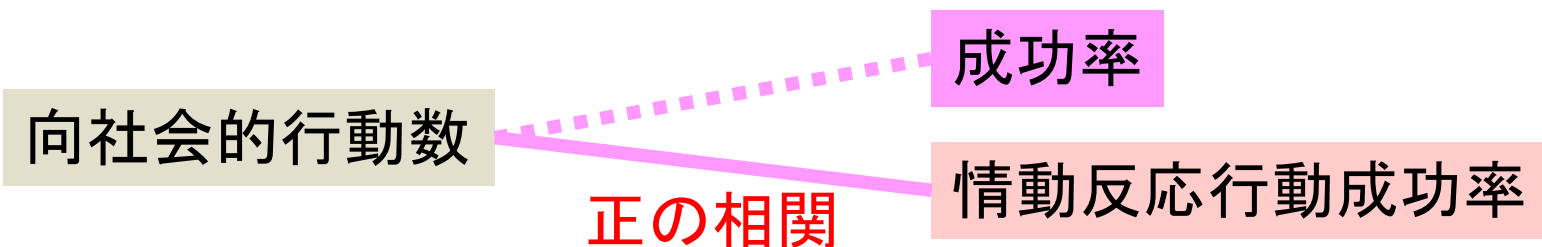
※(一人20分ずつ撮影) × 18～20ファイル

※4つの場面, 4つの時期ごとに集計し平均を出す

観察結果2: 観察された各変数の関連 (Spearmanの順位相関)



観察結果2: 観察された各変数の関連 (Spearmanの順位相関)



観察された情動反応行動をさらに詳しく見ていくと...

泣いている友達に一定時間視線を向ける (配慮の視線) 行動

成功しにくい

それ以外。泣いている友達に声をかける, 頭や体を撫でるなどの行動

成功しやすい

友達が泣いている場面で
配慮の視線しか方略を持たない子は情動反応行動成功率低く, 行動数も少ない
方略バリエーションが多い子は情動反応行動成功率高く, 行動数も多い

向社会的行動の数を増やしたい



成功率(観察者が成功と認めることができる率)を上げることが重要なのかも! ?



個別観察：人形を使った調査(MSSB)



観察された行動はどのような思いからなされているのだろうか？

お子さんの行動(外からみえるもの)だけでなく
内的表象(心の中のイメージや感じ方・考え方の傾向)を
明らかにし、行動との関連をみたい

MacArthur Story Stem Battery: **MSSB**

調査時期：MSSB1回目→2015年10月～2016年2月
MSSB2回目→2016年4月～2016年8月

お子さん1人につき2回ずつ

個別観察: 人形を使った調査 (MSSB)

概要: お子さんを1人ずつ呼び、調査者と1対1で行う。

人形やミニチュアの家具を用いて、調査者がストーリーの冒頭を語り、
続きのストーリーをお子さんに作ってもらう

ストーリーは9つ。うち分析対象は7つ。所要時間は30～40分。

マニュアルに基づき、撮影した動画を2人の評定者が各項目スコアを評定。
7つのストーリー×2回のMSSBの合計点を算出し、お子さんのスコアとする。



◆ お子さんがつくるストーリーのテーマ（攻撃，従順，愛情，一体感，罪悪感，・・・）

◆ 父親／母親人形をストーリーに参加させているか

◆ 父親／母親の表象

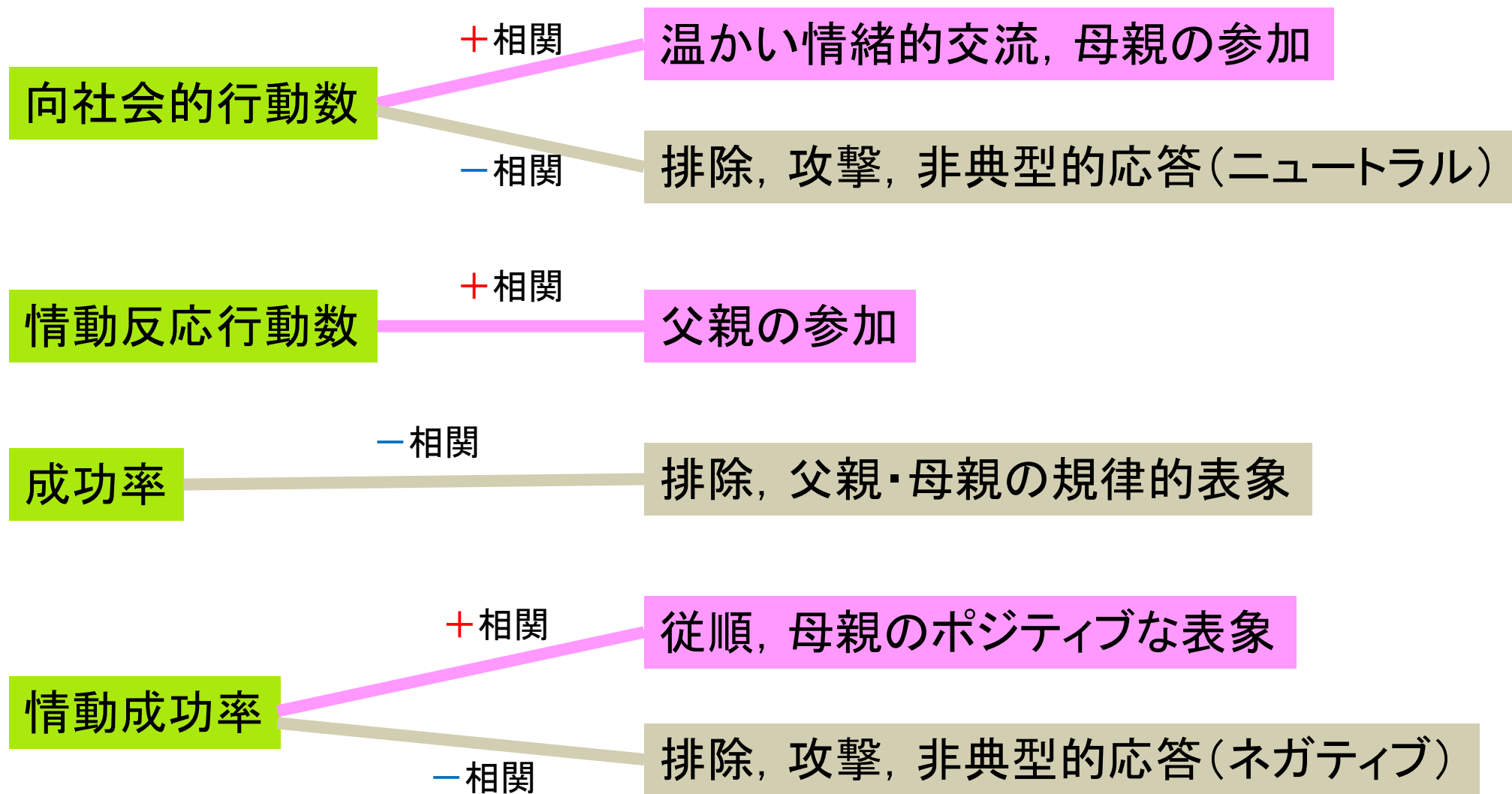
◆ ストーリーづくりに積極的か

◆ ストーリーの筋の一貫性

◆ ストーリーをつくっているときのお子さんの感情表出（楽しい，悲しい，苦痛など）

絵本やTVの影響も大きい。
実際の家族関係の反映とは
限らない。

MSSBと観察された向社会的行動との関連



◆ 観察された向社会的行動はおおむね温かな内的表象に基づくと考えられる

◆ 思いやりの発達を支えるための個別の配慮は、
特に、ネガティブな内的表象テーマを持つ子に向けられるべき

絵本やTVの影響も大きい。
実際の家族関係の反映とは
限らない。

◆ 思いやり行動を認めて／褒めて促すといった行動学的アプローチだけでなく
お子さんの内的表象にアプローチする介入が有効である可能性

まとめ①全体観察

- ◆ 向社会的行動の頻度は1年間でやや減少。
向社会的行動の頻度，成功率，種類などは，
活動場面，保育者の関与の有無のほか，他児のニーズの増減の影響を受ける

全体の頻度の多寡にはあまりこだわらないほうがよさそう
向社会的行動を考えるときは，活動場面や周囲の要因を考慮すべき

- ◆ 向社会的行動頻度の順位と保育者の関与率は負の相関。
声かけとの関連ははっきりとは分からなかった

向社会的行動に積極的に声かけをする保育園を調査すると異なる結果が出る
可能性が考えられる。
声かけの質的分析が必要

◆ 向社会的行動の行動頻度と成功率が正の相関

向社会的行動の成功率を上げるために
行動の方略**バリエーションを広げる**補助的関わり(足場かけ),
向社会的行動を認める声かけなどの行動学的アプローチが
向社会性を支える一つの関わりとして考えられる

◆ 思いやり行動と温かい内的表象はおおむね関連する

行動学的アプローチだけでなく,
子どもの内的表象に訴求するアプローチも
思いやりを支える一つの関わりとして考えられる

「**ストレス場面で
温かなサポートが得られる**」
という信頼関係の構築
絵本やTVなどのメディア利用

おしまい

ご清聴, まことにありがとうございました



東京大学大学院 教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター (Cedep)
特任助教 西田季里